

## 會



## 報

1954年9月

175

日本山岳會

## 海外登山遠征

とPR

吉澤 一郎

去る六月二日の朝、會社への出掛けに「ヒマラヤのこと」という

松方氏の話をきいた。去年の戴冠式に發表されたエベレストの登頂を中心にしての話であった。正確には憶えていないがその結論は、世界の最高峰の征服というものが決して個人の力で成し遂げられたものではなく、隊員相互の善意と協力による賜物であること、又ヒマラヤの登山というものが決して山へ登るだけのものではなく、もつと他に意味のあるものであることを御考え願いたい、というような趣旨のものであったと思う。

私は之を聞いて大變惜しいことに思った。時間が少なくてその意を盡し得なかつたことには充分御同情申上げるが、私がつと語つて貰ひなかつたのは「他に意味のある」というその意味であつたからである。

この間會社から戻つて原稿を書いてある時であつた。聞くともなしに耳に入つたのがこれ又NHKの「三つの歌」。六つになつたばか

りの女の子が大人の歌を憎らしい程上手に唄つた。宮田テル氏は例の調子で應待していたが「お嬢ちゃん、大きくなつたら何になるの」と訊ねた。「あたひ大きくなつたらお母ちゃんになるの」。流石の宮田氏もグーの音も出なかつたラジオは一瞬無駄な電波を流していた。

女の子が大きくなつたらお母さんになる確率は大きい。又中にはおつけをこぼしても叱る人のお父ちゃんになりたい男の子もいよう。實現の可能性の如何を問わず子供達は皆大きな夢をもっている。青年も大人も、老人でさえも夢を持つ。洵に夢のない人生程淋しいものはない。と同時に夢があつてこそはじめて物ごとには張り合いもあり發展もある。人の夢を育てそれを現實のものにする可能性のある國や事業は繁榮し伸びる。英國人は夢を抱いて海を渡つた。アメリカ人は夢を幌馬車に乗せて西へ向つた。誰も逃るものはない。登山行爲も亦、この夢の實現の一つである。

ところで世間には、冬國の登山家達が毎年々々ヒマラヤを目指して莫大な経費を使い、時には地球の反対側からさえも遙るばると出掛けて行くことに奇異の感を抱い

ている人々が多い。

之を皮相的にみると、科學班のことは一応別として、目標の山に登つたか登らないか問題になるだけである。こんな下らないことに何故莫大な金を使うのであるうアルゼンチンの如きはペロン大統領遠征隊という異名(本名かも知れない)までつけて出掛けていつた。常識からすれば沙汰の限りである。そんな馬鹿々々しい他人の道樂に假令百圓の金だつて出せるものか、金融引締めだ、デフレの強行だ、織屋、商社、メーカーの倒産、お手上げだと青息吐息の眞最中に、唯高いところへ登りに行くだけのことに貴重なお金が出せますものか……とまあこんな風に考える人は随分あろう。

そこで私は考えるのだが、日本の登山家達は英國やスイスやドイツの登山家に比べて、よい意味での宣傳即ちPRが非常に下手であり、又不足している、ということである。

抑々と聞き直るまでもなく、PRというのは個人又は企業體や組織體が、その事業をスムーズに行うためにする、共存共榮の理念を基礎とした政策であり、實踐行爲である。従つて之を行うことによつて多くの對象の理解と好意を獲得し、その支持を永く確保するこ

とであるから、この道理は當然われわれの登山行爲、殊に多くの支持を必要とする海外登山遠征を妥當化することにおいても應用せらるべき筈のものである。

われわれ自身の個人的登山行爲のためのPRの對象はせいと身近かな者に限られるのであるが、こと海外遠征ともなれば事情は大いに異なつて来る。

海外遠征の場合の對象は大きく分けて國內並びに國外の人々となる。人々といつたのはPRが結局人と人との關係即ちヒューマン・リレーションズを圓滑にすることにあるからである。

「私は山が好きだから」では「それならどうぞお勝手に」ということになり、又マロリーのように「そこにあるから」では余りに哲學的で、登山家或いは英國人には解つても一般の人々、特に日本の一般の人々には解つて貰えない。それを理解して貰うためには一般の人々に解るような説明を、それも自己満足に過ぎないようなものではなく、誰にでも納得のいく説明を普段から用意しておかなければならない。而もそれを凡ゆる機会を積極的に捉え、マス・コミュニケーションの有力な媒體——山岳會の會報や山の雜誌位では範圍が狭い——を利用し、計畫的に

# て 達 人 ヤ ラ マ ヒ マ つ 会

一 松 田 雄

一九五四年度のヒマラヤ登山は種々のトラブルのために全くみぢめな結果に終つてしまつた。併しこうして山に敗れた私達の氣持をいつも慰めてくれるものは山で會つた人達の暖い印象である。今でもたえず愉しい記憶の中によみがえつてくる。

シエルパについては云う迄もあるまい。最初カトマンズで彼等に會つた時の印象は余りにも意外だつた。どちらかといへばもつと體格のよいごつい人達と思つていたが、にこ／＼と氣安く私達のそばへ寄つてくる彼等を見て、こうした私の想像は全く違つていたことを知つた。人の良さそうな頼もしい彼等に圍まれた時は、丁度新年を迎えて新しい部員が入つてきた時と同じ様だつた。それが入つたから始るとするキャラバンの旅が新人生歓迎山行を想わせたりした。事實こうした私達の期待は裏切られなかつた。キビ／＼した動作である多人数のポーターを巧みにリードして行き乍ら終始私達の世話をしてはくれるという仕事は容易なことではない。それにも拘わらず彼等はよく私達と融けあつてくれた様だ。不思議なものでお

互の言葉の不自由さなどは簡単に通じてしまふものだつた。不自由しないどころか相當突つこんだ話迄出来るのだから便利なものである。私達が期待していたブルース將軍やロングスタッフ博士の話をしてくれるものがいなかつたのが一寸寂しかつたけど、考えてみればこゝでも、もう世代は一つ變つてしまつてゐるのだから無理もなかつた。

併しサーダーからはシプトンバラ・サーブの話や、ダ・ナムギヤルからはティルマン（チリメン・サーブと彼等はいふ）の話や聞かせてもらつた。彼等の話す一語一語は貴重な文献を讀んでいる様なものである。しかも生きた文献を……。

エヴェレストの話も随分聞かせてもらつた。だからシエルパ達の眺めたエヴェレストの話や聞いて後でハントの本などよむと種々比較出来て面白くよめた。ダ・ナムギヤルからは昨年の京大のアンナブルナの話や聞かせてもらつた。彼はふだんは無口な男だが、一度話に入ると興奮して賣演迄入れての熱心さだつた。またサーブ達の裏話も種々と話してくれた。今頃はダーゼリンで日本のサーブ達の噂でもしてゐることだろう。そしてこの次ヒマラヤに行く人も亦シエルパのサーブ觀を面白く聞けることゝ思う。

ガネツシユの歸途、シェブチェといふ部落の下で「Seven Years in Tibet」有名なオーストリイのアップ・シユナイダーに會う機會を得た。たゞすれ違ひに挨拶をかわしたに過ぎなかつたけれど、

繼續的に行つていかなければならぬ。行く前の講演會、歸つてからの報告會（會計報告や記録の公表なども之に入る）これらは必ずやらなければならないがそれだけではもの足りない。

日本人は、特に山岳人はよく云へば深辯であるが、PR——所謂自己宣伝とは違ふ——には一般に憶病で遠慮勝ちな人が多い。ヒラリーのように講演してやるから講演料百萬圓と旅費日常を出せという位で丁度いゝのではあるまいか日本の登山家は山においては相當果敢な行動を取り得る人でも、人見知りをする人がいる（しない人もいるが）、之では大規模な登山遠征は行えないのである。

日本の登山家は、PRの觀點からすればもつと大人になり視野を大きくする必要がある。ジャーナリズムも亦もつと眞剣に、正直に謙虚でなければならぬ。PRとはそうしたものである。

國內へのPRは登山精神の解明が中心問題となる。大衆は割り切れたものみに共感と同情をもつものだ。私は思う、登山への衝動は未知を解明しようとする人間生來の欲望の純粹なる現われであり之は科學者の自然における未知の探求にも相通するものである。そ

して又登山は人間による自然支配の可能性を實踐する願つてもない機會の一つであり、日本からヒマラヤへ行くといふことは、微笑ましくも豊かなる冒險精神の發露であると共に、日本人にも亦こういふことが出来るという民族意識の高揚のためと同時に、對外的なPRのためでもある。輸出されてゐる日本の優秀な機械をみてゐる外國人が、それが made in Japan であることをどうしても信じなかつたといふことも、PRの不足に由来するものである。

國外に對するPRも亦忽せに出来ない。M氏からは間接に、K氏からは直接に耳にした現地の顔役に對する仁義の如きは、少しくその國の民情を研究し風俗に親しめばわかることである。調査がPRの前提であり、締めくくりであり次のPRへの反省の基盤であるといふことは、PR學における初歩の原則である。それにも増して一層根本的に大切なことは人權の尊重である。たとえシエルパであれポーターであれ、土地の住民であれ、總てはわれわれと平等な人間であるといふことを忘れてはならない。このことを忘れてはならぬ。國內的なPRが完全なものであつても遂には全部を根底から覆え

してしまふ。技術の研究も必要であるが、こうした面の研究と實踐を粗末にしたら日本の海外遠征は何年経つても進歩はしない。

某君が文藝春秋の八月號に出した「ラマ教徒と闘うマナスル登山隊」というのを讀んだが、その中に、なあと、僧正にたんまり握らせれば何とでもなるよ、欲の深いチベット人だもの」「……無統制の狂信者」その他に類した文句が隨所に見られるが、之等の言葉が若しチベット語やネパールの言葉に翻譯されて彼の地の人々に讀まれてしまつたなら一体どうなるか。日本からは今後ヒマラヤ行きが絶対に出来なくなる許りでなく、日本とネパールの國交の上にも重大な支障を來すことになるのではないか。私は心配で仕方がない。新聞社の人達はセンサーショナルなもの書き方に慣らされてゐるのでつい筆が走つてしまつたのであるが、國外に關係する事柄についてはもつと視野を擴大し常にPRを念頭において貰いたいと思う。

これを要するに私が日本の登山家に望むところは、セクシヨナリズムを揚棄し、善意と協力に基づく團結を強固にすると共に、パブリック・リレーションズの問題に眞

イカメシイ格好で山を下つてきた私達と對稱的な純白なワイシャツ姿が印象的だった。勿論その時は名前を知る由もなかつたが後で彼だと知つて大事なものでも落した様な気がした。そして今更乍ら『本當のヒマラヤずれ』ということを考え直してみたりした。

最後にヒマルチュリへ廻つた時にルピナ・パスの下のB・Cでヒマルチュリ南稜上にあるパウダー峰へ来た英國隊の二人とキャンブを共にする人が出来た。以前から一度英國の人達とゆつくり會つてみたいと思つていた處だったから、お互いに楽しい時をもつことが出来た。シプトンが昨年エヴェレストが登られた後でAfter Everestと題してエヴェレストが登られた後のヒマラヤ登山の動向といふたものにつつき、非常に示唆に富んだことを述べているが、エヴェレストの英國隊と較べたら比較にならない程小さい貧乏旅行とでも云える様なこの隊を見て、シプトンの傳統が傳つているのが見られる様な気がして他人ごとながら嬉しく思つたりした。

以前の英國ならとても出来そうもないこの種の登山を、やれる彼等が羨やましく思われると共に、こゝではつくつ、スモール・エキスペディションのよい所を見せてもらった。

或る雨の日の朝、今日はゆつくりと話しを聞けると楽しみにして英國隊のテントを訪れたら早朝から出かけてしまつていて留守だった。晝近くなつて歸つてきた處をつかまえて、今日の行動について聞いてみたら、ヒマラヤでの休暇

も終りに近ずいた。せつかくヒマラヤ迄出かけてきたというのに、一日だつてちつとして休んでなどいられない。たゞその邊をふらふらと歩いているだけで楽しんでいるだ」と二人で楽しそうに笑つて答えてくれた。この時は本當に山が好きなのを見て、こちらが恥ずかしくさえなつてしまつた程だった。

休暇を利用して自分達の方だけで気軽にヒマラヤに迄出かけられる國柄も羨やましかつたけど、コンウェイやウィンパー等の大先輩をもつ英國の傳統もまた羨やましく思つた。この二人の英國人の與えてくれた印象は数々ある。そして私達の誰かが將來に對してある一つの自信をもつたことは事實だと思ふ。その日の午後は倉庫のテントの中で夕食の時間になる迄四時間の間種々と話した。後になつて何を話したかといふ願つてみたら、裝備の話から始つてウエールの山登り、日本アルプスとウエスタン、A・CとJACについて等からウイムパーやスマイズ等のことに迄渡つていた。そしてろくに英語も話せぬ私なのはどうしてこんなこと迄意志が通じるのかと意外な思いさえしたものだ。同じ氣持で同じ一つの理想を追求している者達の間には國境などというものはないといふことをこの日はつくつ、感じさせられた。ヒマラヤの旅を通じての楽しい思い出がこゝでもまた一つ出来た譯である。(29・8・31)

× × ×

劍に取組み、之を強力に實施することであり、更に又一般の人々に對しては、偶には富士山の二倍半の高みに眼をやり、夢のないところには民族の發展も、國家の繁榮も、事業の隆昌も望めない、ということを悟つて頂き、夢多き青年達の行動におゝらかな理解と同情とを与えられんことを希うものである。

〔筆者は現在日本電報通信社大阪支社において企畫調査局長とPR部長を兼任してゐる〕

### ヒマラヤ研究会 にご出席下さい

會務報告欄記載の如くヒマラヤ研究会を八月末からだいたい毎月二回、金曜日の午後六時半から、

### 一新着優秀スキー紹介

#### ★外國製スキー

エミール・アレー サイン入  
フランス ロッシニオール  
發賣元

ノルウェイ エリクセン  
スイス ライメックス  
スイス アッテンフォアー  
ノルウェイ グレスビック

#### ★國産スキー

西澤 マーシュウエスト  
小賀坂 白 鷹  
直井 スワロ

登山とスキー具の専門店  
**好日山莊**

東京・中央区・銀座西二ノ五  
振替口座 東京113657 電話(56)3600

ルームにおいて開いております。できるだけ多くの人が出席して勉強していただきたいと本會では希望しております。今後の開催日は左の通りですからヒマラヤにご關心をおもちの方は進んでご出席下さい。

九月卅日  
十月八日、廿二日  
十一月十二日、廿六日  
十二月十日

#### 支部長懇談會

かねて各支部よりの希望もあり會としても、支部との連けいを如何にして緊密化し、強化するかということについては、交野支部擔當理事を中心に考慮中であつたが、とりあえず支部長懇談會を開催することになり、九月十二日の日曜日その第一回を午後一時から

ルームで開いた。  
藤島(越後) 中田(富山) 三井(山梨) 池田(石川) 篠田(關西) 各支部長及び東京からは杉本理事長、關西から梶本氏、會から榎會長、日高、松方副會長、別宮、神谷、沼井評議員はじめ各理事出席。

會長より挨拶の後、フリートークキングの形式で支部の在り方、運営、五十周年記念事業、會務、會費その他岳連はじめ當面の諸問題につき意見を交換。六時より簡単な食事を共にしつゝ九時すぎまで談論して解散した。

#### 〔訂正〕

會報一七三號十一頁所載、婦人部の記事に、日本山岳會婦人部とあるは東京支部婦人部の誤りです。



### 完登八千米に加わった K<sup>2</sup>

吉澤 一郎

りで行っているのだから(會報前號参照)當然だといつてしまえばそれまでの話。エベレストの頂も歴史の上に積み上げられた最後の榮冠であつたが、K<sup>2</sup>も矢張り同じである。

だがこのニューリスを知つて直ぐピンと頭に來たのはハウストンのことであつた。ニュー・ハンブシャーという小さな州のエクセターで、町醫

者」とへり下つてゐる彼博士も、一個の人間であつてみれば、さぞかしがつかりしたことであろう。例の「Five Miles' High」の後この秋には「K<sup>2</sup>, the Savage Mountain」とかいふ本が出るという話もある。どんな内容かは知らないが一應はK<sup>2</sup>をアメリカの山として書いていたのではないかとも思う。今度の成功を聞いてその記述も多少變えることであろう。

去る二月に彼はパキスタン政府から一九五五年度の再攻撃の許可を得て着々準備中であつたが之も中止したらしい。僚友のギルケイを一人山に残して(而も死體は行衛不明)悄然とパキスタンの地を去つて行つた彼の心情を併せ考えれば、われわれとして彼を慰める言葉は何もない。

如何に技術が優秀で、全体の組織と行動に統制がとれていても、ヒマラヤやカラコルムにおいては

K<sup>2</sup>については私も随分書いたものである。「山岳」第三十四年第一号(昭和十四年)にはC・S・ハウストンの許しを得て一九三八年の分を紹介したし「會報」の方にはビエロ・ギリオネ氏の奥さんが英譯して送つてくれた一九三九年のウィイスナーの手記を、又昭和十五年(一九四〇年)の七月には報知新聞に、昭和十七年一月には「山と溪谷」に一九三九年までの分を一応纏めて出している。

この八月一日に上京して豫算會議に出席し、連絡や訪問で汗を出し乍ら歩き廻つていた時に丁度K<sup>2</sup>登頂のニュースが入つて來た。K<sup>2</sup>がやられたというニュースが突如として入つて私は「矢つ張りね」とホツとしたり、エベレストの時と同様に多少張り合い抜けがしたというのが本當のところであらう。

運が即ち天候と山の状態が最後にのをいう。ナンガ・パルバットのヘルマン・ブルーも随分目茶苦茶な男であるが、幸いにも天候に恵まれて成功した、というよりも助かつてゐる。エベレストの登頂にもヒヤ／＼させる点がないでもない。

こうした点において今度のイタリー隊も恵まれていた。但し恵まれる前にわれわれは猛吹雪に對抗した闘志と忍耐の二週間あつたことを忘れてはならない。彼等はその後で最後のチャンスに恵まれたのである。カラコルムはヒマラヤも東部の山々ほどにはモンスーンの影響が少なくといはれてゐるこの點ではエベレスト、カンチ、マナスル等とは比べものにならないのであるが、それにはそれで又時を選ばずに襲つて來る猛烈な吹雪と烈風に遭遇することも覺悟しなければならぬ。昨年のハウストン隊の経験がよく之を證明してゐるのである。

前置きはこの位にしておこう。尚一九三九年のウィイスナー隊(彼は獨系米人である)までは前述の通りに發表済みなので、こゝには一九五三年と五四年のことについて概略を御紹介しよう。但し五四年の分はこゝ一、二ヶ月の間(ドン)情報が入つて來ると思うので、入り次第順次詳細を御報告させて頂く。

★一九五三年隊(米國)  
隊長 C.S. ハウストン 42  
隊員 G.R. ベル  
R.W. クレイグ

彼はこの遠征隊員中遂に山中において不歸の客となつた唯一の人。享年二十六歳。アイオワ州エイムズのハーバート・J・ギルケイ博士の息。一九四九年アイオワ州立大學卒業、一九五一年にはコロンビア大學の文學士號をとり、出發の頃には同大學の地質學博士獲得のための論文「世界の大斷層山脈の内部構造の比較研究」が殆んど完成に近づいてゐた。

海軍に二年間入隊、西部ワイオミングにあるグラント・テトンにガイドとして遠征したこともある経験者であり、今度の出發に際しては最も健康で、少くとも四人の



登頂候補者の中の一人であつた。

行動經過  
一九五三年五月二十七日、飛行機でカラチ着。翌日ラワルピンディに向う。

六・四 ラワルピンディ發  
カラコルムに入つてからブラルゾー河の横斷に思わぬ困難にぶつかる。

- R.H. ベイツ
- D. モウルナル
- P. シェーニン
- A.K. ギルケイ
- 現地連(H.R. MA. ストリザー大給將校(尉) M.A. アタウラー大佐
- ▼遭難者アーサー・K.
- ギルケイに就いて

- 六・一九 バルトロ水河上五〇九〇米にBC建設。
- 七・二一 C6(七一〇〇米)
- 八・一 C8(七九二五米) 頂上攻撃隊により設置された。又一週間連續の猛吹雪。
- 八・三 この頃よりギルケイは凍傷による炎症から血液凝固と無自覺状態に陥つてしまつた
- 八・九 登攀續行遂に放棄決定。
- 八・一〇 下降開始。
- ギルケイを寝袋に入れてC7に下降することになつたが、七六五〇米附近にあるやせ尾根から全員ロープにつながれた儘斷崖を四〇米落下。ラストマンのシェーニンが超人的な力で岩棚による食止めに成功しなかつたならばマッターホルンの二の舞を演ずるところであつた。
- この際隊員は自分達の日記衣服、寝袋、カメラ、貴重な乾板など全部失つたがハウストンが一番ひどかつた。人事不省に陥る。ギルケイは寝袋に入れられた儘、二本のピッケルで斜面にく／＼りつつけられ、救援の來るまで待つことを承知した。
- 然し後に救出に向つた隊員は彼の姿を発見出来なかつた雪崩の下敷きになつてしまつたのであらう。
- 八・一六 全員BCに集合。僚友ギルケイのため十呎のケルンを積み彼の冥福を祈つた。
- 九・六 カラチ着。

# 川の三つと山の一つ

日高信六郎

會員の古澤肇君と大町に下りたのは八月十五日の朝。驛前が廣くなり山の案内所とバスの切符賣場が隣りあつて便利になつた。慾を云えば日よけ雨よけのテントぐらゐ張つた上、登山用品や食料を手輕に補充される賣店をその邊に置いたらお客も助かるし町ももうかるだらう。その節には列車到着とバス出發との間に今少し時間の餘裕を置く必要がある。

案内の丸山充嘉他一人をつれその日は葛温泉に泊る。こゝは經營者が變つて今年一棟新築し、バスの回数がふえて折柄の日曜に日歸り客を交え満員の盛況。

高瀬川を湯俣まで歩く。菅林署のガソリンカーが間もなく湯俣の近くまで動くとのこと。發電に水を取られて流れは貧弱になつたが緑の谷とその奥にはだかる北鎌尾根のいかついシルエツトに胸がおどる。見かえる空を限る針の木の連嶺も立派だ。湯俣の噴泉塔や散石は心ない人たちの手にかかつて出来上らないうちにこわされたり採られたりするの惜しい。

湯俣岳から眞砂に登るみちには地獄のそばから急峻な小澤を鐵砲のぼりに尾根に出て林中を行く。笹は一應刈つてあるが、通る人が稀なので歩きにくい。湯俣と南眞砂

の鞍部に水溜りを見つて野營し翌日烏帽子からの縦走路に出る頃荒れ模様になり東澤乗越にテントを張るや否や暴風雨となつて翌々日の晝まえまで蝸居。底つきのテントの中に大小のツバタ池が出来て惱まされたが、台風の後夕景は澄みきつて奇麗だつた。黒岳に道草を喰つて黒部源流のほとりに着いたときは夜が更けていた。

雲の平に遊んだ一日は快道をきわめ、テントに戻ると留守中に人夫が釣つた岩魚の串が焚火を圍んで待つてゐる。夕の饗宴に飽食しても片付かず翌日双六小舎まで持ち越したら、そこでも縦澤でこれた大きな奴のフライにありつた五年前再開匂々のこの小舎に泊つたとき可愛い小學生だつた經營者の息子さんが、立派な青年になつてキビキビと立ち廻つてゐるのを見出してはうれしく、自分の足どりが段々危かしくなり行くのも無理はないと肯ずかされる。

先年に較べるとみちも小舎も登山者の裝備も萬事整つて来たが、指導標などは却つて少くなつた様な氣がするし、あつても行先や所要時間の表示が殆どない。縦走路に點在する小舎主の利害がその間に介在してゐるとの噂は信じ度くないが、國立公園に指定され山に慣れぬアルピニストも少からず歩くところだけに、今少し親切な措置が望まれる。

双六谷はずい分みちが良くなつた。と云つても金木戸川沿いのみちが荒れて殆ど通る人がなく、双六小舎から暫く谷を下つて、六千尺から左手の尾根をからみ、二二三二の三角點を通つて打込谷

に急降下し吊橋を渡つて打込小舎跡で昔のみに合し、急坂を下つて本流を渡るのだから、双六谷の最もいい部分を書くのではないが打込谷の横つた源流や迫つた落口の邊りの趣に親しむことが出来る。伐採はいま小倉谷と中の俣に入つており、森林軌道が神岡に近い浅井田から廣川原の奥まで敷かれ廣川原と中の俣の菅林署の事業所では登山客を快く泊めてくれるし指導標もよく出来てゐる(軌道は早朝浅井田發、下りは廣川原發十一時頃、所要時間約三時間)。この邊の暮しは相不變苦しいらしく最奥の金木戸部落は元來十軒足らずの人家だつたのが、段々土地と家を見捨てて神岡の町に出る人が多くなり、遂に二軒だけになつたと云う。軌道から見上げると廢屋や社が茂つた草木に包まれて、妖しいわびしさを發散してゐた。

バスで平湯へ。昔の平湯温泉を知つてる者にとつては、昔ながらの山と木立に取りかこまれた小盆地の畑に入交つて、古い造りの温泉宿や民家が建増したり改造したり新築したり、世間なみの行樂地らしくジャズのひびきや嬌聲をはり上げてゐるのははかなくも笑止である。

近頃の北アルプスでは登山客が通る道すぢは殆ど定まつてしまひ人氣のないところはすつかり見限られた傾があつて、今時こんなヤクザク山のぼりをする酔狂人はい上に季節のせいもある静かな山旅を味わうことが出来た。

案内の丸山は五十を過ぎ、恐らく大町では昔氣質の山案内の最後の一人かも知れない。

尚一行がラワルペンデイに着いた時、一九五四年度の偵察隊としてやつて来たイタリーのデシオ及びカシンの二人に出會つてゐる。

## ★一九五四年隊「イタリー」

イタリー隊としては前記の偵察を含めて四回目バルトロ入りで今年にはCAAIを中心として職業的案内人も職業的でない隊員として澤山参加してゐる。今までにわかつてゐるのは會報前號に發表してある。

資材の總量は十屯に及び最も完備した遠征隊の一つといわれてゐる。

## 經過

三・三一 ゼノア出帆、カラチ、ラワルペンデイ經由でスカルゾーに向う。

四・二三 スカルゾー發  
デシオ等はパキスタン政府の好意により予め陸軍機K2で周邊の氷の状況の報告をうけたが、遠征期間中午前三時から午後三時まで三時間目毎に氣象通報をスカルゾーから受信してゐた。

スカルゾーからバルトロ水河までは一六五哩、二十日を費した。アメリカ隊より六日費計。到着の日にはアメリカ隊より一ヶ月早かつた。コンコルディアにおける積雪二呎。

五・二〇 BC (五〇九一米)  
六・二一 C2 (五八〇〇米)でアオスタ谷のクールマイエルから来た三〇オのマリオ・プチョーゾ肺炎で死亡。

七月に入り C7 (七九二五米)で二週間の猛吹雪。よく之に堪えた。

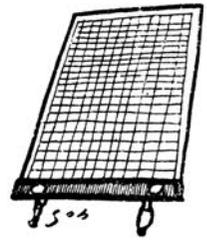
七・三一 アキルレ・コンパニョ1(二他一名(確報に非ず)午後六時登頂。二人は最高キャンプに戻り報告を終ると同時に倒れてしまつたという。

一九五四年隊については今は之だけしか御報告出来ない。私も後報を期待してゐる一人である。

〔實況説明〕 四頁上は南方より見たKの峰頂、V・セラ撮影(Baloroより) 下は一九二九年當時のアルデイト・デシオ教授、G・O・デイルンフルト撮影(同上)



カワミヤのアルパインソール  
耐久・不磨耗・滑止  
あらゆる点で NO.1  
合資会社 代表 平林 三郎  
**カワミヤ靴店**  
東京都大田区大森 8-3740  
TEL (76) 5882



# 第九回国民体育大会 登山部門報告

第九回国民体育大会登山部門は七月二十四日から二十八日まで北海道大雪山で行われた。

快晴の二十四日午後二時、高松宮、同妃殿下をお迎えして旭川市常盤公園で開會式を舉行。大會副會長川口忠氏(北海道山岳連盟會長)開會を宣言、國旗、大會旗、北海道岳連旗掲揚の後、大會長榎有恒氏の挨拶、旭川市長坂東幸太郎氏他の祝辭があり、選手代表(神奈川)の宣誓あつて閉式。

直ちにバスでA、B、C三班は層雲峡へ、D班はベイパンへそれぞれ出發。A B C三班は上川町で同町の歓迎會に臨み、D班は東旭川村で同様歓迎會に臨んだ後目的地に到着第一夜を迎えた。

これより先、二十三日午後、旭川市役所において地元役員諸氏と本部技術役員の打ち合會を、また二十四日午前九時より驛前朝日ビルにリーダー會議を開いて打ち合を行った。

各班の編成及び技術役員の名前は次の通りである。

▼本部班 榎有恒 佐藤久一郎 千谷壯之助(マネージャー) 渡邊公平(技術委員長) 金坂一郎(技術副委員長) 船越好文(寫眞)

▼A班 チーフリーダー成瀬岩雄 サプリリーダー野田福五郎 リー

ダー村上勝太郎 松田利隆 羽鳥肇 杉野目浩

▼B班 チーフリーダー小原勝郎 サプリリーダー榎本徳次郎 リーダー十龜太郎 沼倉寛二郎 石坂昭二郎 福住修治

▼C班 チーフリーダー交野武一 サプリリーダー橋本誠二 リーダー高橋定昌 星野登 梶川晃平 今井喜美子

▼D班 チーフリーダー林和夫 サプリリーダー藤井健 リーダー山崎英雄 徳永篤司 戸野昭

各班の行動概要は會報前號においてご紹介した通りのものであるが、第二日午前より低氣壓の通過に遭遇、各班とも若干豫定の時間に狂いを生じたが、整然と風雨の中に暮營、第三日午前中は雨と濃霧のため展望はきかなかつたが晝頃より次第に晴れ上りエコマンベツ、天日峡に到着した頃には着空が擴がり、乾し物に忙がしかつた。

第四日は快晴、大雪山の中腹のみ霧がまいていたらしい。A・C兩班は午後二時天日峡を、B・D兩班と本部は十二時エコマンベツを出發、バスで旭川市に向う。途中、東川村の歓迎會に臨み、午後四時旭川着。常盤公園にて夏

季大會閉會式を行った。

渡邊技術委員長の講評(別項)の後、榎大會々長より閉會の挨拶を行い、大會旗、國旗が降納され大會歌「若き力」の合唱裡に第九回國體夏季大會の幕を閉じた。

旭川市をはじめ、上川町、東旭川村、東川村等沿道の市町村から受けた歓迎はまことに熱狂的なものであり、沿道の人々が選手、役員に示された厚情と誠意は生涯参加者の記憶に美しく残るであろうこの機会に關係市町村の官民諸氏に對して衷心より感謝の意を表しておきたい。

また旭川の陸上自衛隊通信部隊が悪天候の中にあつて各班及び本部との無線連絡に當られたことも大會の運営に寄與したこと大なるものがあり深甚なる謝意を表するものである。

## 講評

### 渡辺公平

第九回國體登山の特質は雄大な大雪山を舞臺として、天幕露營による二泊三日の縦走といふことにあつたが、第二日目から三日目晝にかけて低氣壓の通過に遭遇したため、登山の内容はいつそう豊かにかつ多彩なものとなり、リーダー(監督をかねる)選手諸氏には常日頃鍛えた體力と訓練の成果を遺憾なく發揮する好機會となつたと云えよう。

この天候上の悪條件にもかかわらず、登山を豫定通り何等の事故もなく圓滑に運営することの出来

たのは、リーダー、選手諸氏の健闘もさることながら技術役員、地元役員その他關係官民諸氏の特筆すべき協力の賜であり、深甚なる敬意と感謝の意を表したい。

以下、チームワーク、リーダーシップ、メンバースhip、露營技術、裝備と食糧、歩行その他について講評を行う。

その前に一言選手の選衡方針について申上げたい。

選手の技術とチームの團結、協力は都道府縣における選衡方針と方法によつて決定される。登山の性質上それらについて一定共通の規準を設けることは、まだ困難な状態にあるのであるが、その選衡に適正を缺いたと思われるチームが若干あつた。その結果チームとチームの間に懸隔が出来すぎ、ために班全體の行動に影響を及ぼしたものがあつた。

國體登山は最高水準の登山を期するものではないが、都道府縣としては少くとも一流水準のチームを編成するべきであつて、特にこの點に關し今後の檢討を要望したい。

チームワーク・リーダーシップ・メンバースhipについて

以上の點から推してチームワークの點で十分でなかつたものがあつたのは止むを得ない。

リーダーシップ、メンバースhipの問題は登山において最も基礎的なものであるが、國體の場合においては特に大切であり、また困難性をもつており、今後の研究が必要であるが、熊本、福島、山梨鳥取、東京、愛媛、神奈川、長野京都、山形、北海道の各チームは

## 山日記

### 一九五五年版

來年の山日記は、今年のように更に内容を充實し、また更に讀んで愉しく、かつ有益な登山者必携のバイブルたらしめべく、目下鋭意編集集中であります。

十一月末、おそくとも十二月の上旬には皆様のお手許にお届けすることができると存じますから、氣のきいた

クリスマス・プレゼントとして御利用下されれば悦ばれるのではないでしようか。

五四年版は早く品切れになつてしまつて大變ご迷惑をおかけしました。できるだけ早目に御豫約を下されるのが得策かと存じます。

内容は例によつて豫告版「山日記」の榮ができておりますから著名な運動具店あるいは茗溪堂にいらつしやればご進呈申上げます。

とにかく全部が新しく書きおろされた新稿であり、最新の知識と最新の調査によつて作られた

登山のポケット百科全書になるものと自負しています

▽地圖三〇葉 ▽寫眞二葉

## 東京神田駿河台

### 茗溪堂

電話29(三〇一一) 六五(二二二二) 探検東京二四七三三





## 会員通信

### 保呂内沢を下る

大橋 克也

湯濱は栗駒の南麓。いかにも山の宿らしい閑寂境で夕膳には岩魚を出す一軒屋です。前日御澤を廻

私は今年古稀の年になった。加賀君は四ツ五ツ年下と覚えていて幾つ頃のからの知り合いだったか又どうして結ばれたか思い出せない。然し加賀君の結婚前からの知り合いであった事は、その披露の席に招かれた事からもわかる。そうすると多分四十年以上の交渉と云うことになる。

加賀君の登山歴などは、一向に覚えていない。然しロンドンで日英博覧会の開かれた時、學校をサボッテ渡歐し、アルプスに登つたのは、吾々「日本山岳會」のグループとしては最初ではなかつたかしら。加賀君のアルプス行が後年の辻村、近藤君のアルプス旅行の刺戟ともなり、端緒となつた事は當然であり、更に楨君、松方君★

行栗駒に登りましたが澤は水量も多く要所々々には一服に格好な流や岩が待つていて實に快適、最後に原生林がパツと開けて雪溪とお花畑の登高を樂しめるのがこのルートの上さでしょう。

翌八月二日は豫定を變へ保呂内澤沿いに間歇泉の鬼首に出ることに決め、入り口は不明瞭だといのでそこまで湯濱の主人に案内して貰いました。このコースは地圖にはなく秘境めいた間道です。澤を幾度か越え、樹々の根で出た尾根徑を約一時間。盗人の瀧の下流で鎌内澤を渡つてホロカマの峠に出、蛇の横行する袖徑から待望の保呂内に入つた。澤は潤達で岩入の部落に向けてほぼ直線に走つて光つていた。廣い河原、白い澤瀨は浅く、水は冷い。本當に東北

加賀君の奥さんに出來たら、洵にふさわしいのだが」と云う話であつた。それが間もなく實現したのが、今は未亡人となつた千代子夫人である。

此兩君が加賀君の御目出たの披露の時、どれだけ喜んで私に前言葉を繰返したかは、折りがなく今迄、加賀君にも語らなかつたし、千代子夫人にも話した事は無い。朝輝君は二十年位前に他界したが、竹下君はどうされているか健在としたら、感慨深いものである。

人様の結婚話ばかり書くが、この加賀君の御目出たの時、大阪から（加賀君の家は大阪である）私に「寫眞器を持つて直ぐ來い」と云う意味の電報が來た。その頃私

離れたした素晴らしく明るい澤です。鉞を振り下した様な兩岸のガレや徒渉の連続でさえ全然暗い感じはありません。

荒雄川への合流點近くで材木を積むトラックを掴えたので、夏雲の下、清流に足をひたして洗濯などし、すつかり甲羅を乾して仙臺へ歸る。保呂内は楽しい澤でした（八月十五日）

### 愛染山と五葉山

村上 金吾  
太田 廣

愛染も五葉もときどき出かける山ですけれども、こんどすこし變つたところを歩いたのでお知らせします。

八月八日、二人で釜石線上有住

加賀君の働き盛りには餘り交渉を持たなかつたので、殆んど會う機會がなかつた。それが四、五年前に、藤島敏男君から、某日加賀君が山岳會のルームに來るから、加賀に會いながら來ないかと云うお誘いの手紙が來たので、同君とも久瀧を叙したく、出かけて行つた所、藤島君は未だ來ていないし、どうも見馴れぬ、如何にも老人らしい、失禮な言葉だが乾枯らびた、然し何んとなくスマートな老人がいる。

いつたい加賀君は未だかいなと考へたが、さて未知の老人に、「アナタはどなたです」と聲をかけるわけにも行かない、先様も妙な顔をして眺めている。然し落ちついて見ると、どうも加賀君の面ざ

（かみありす）驛下車、國鐵バスで中梓（なかぞね）までゆき、そこから徒歩で檜山（ひやま）を経て愛染山の西南面をのぼりました。カワラナデシコ、ムラサキホタルブルク、ヤナギラン、アキノ

ケリンソウ、クルマユリ、ハクサンフウロ、コケモモ、オニシモツケなどが咲き、ハイマツ、シヤクナゲなども多いが霧深く展望は全くなりません。十時三十分頂上について休息。そこから尾根傳いに東南方におりましたが、この山の東側は西側と山相全く對しよ的で、西側の明るい高原風景が忽ち東側の峻絶極まる断崖となり、中でも犬轉しの岩壁は物凄く峭立しています。幸い尾根筋に最近營林署のつけた切り開きがあつて大體歩きよく愛染と五葉の鞍部におりそこから五葉山の環状林道に出五分で大松口の五葉登山道に出ました。それから雨の中を一時間ばかりで五葉山の頂上へつきました。歸りに頂上と環状林道の間あたりに山賊が最近まで住んでいた山小屋があるというので、グツシユのなかを一時間半もさがしまわつたが、ついに発見できませんでした。

八月二十二日、五葉山の水無澤（みずなしざわ）をつめて見ようと釜石線瀧泉（どうせん）驛下車、途中から参加者があつて一行八人で水無澤についたのは九時、そこからその名のとおり、水が伏流してゴロゴロした石ばかりの澤をのぼつてゆく、まもなく水が流れ、その間に幾本もの澤が流れ、その間に幾本もの澤が流れています。このあたりはヒノキア

スナロ、ヒメコマツ、カツラ、カワグルミ、イタヤ、トチなどの原生林ですが、私達は水の多い本流と思われ、左側の澤をのぼることにしました。

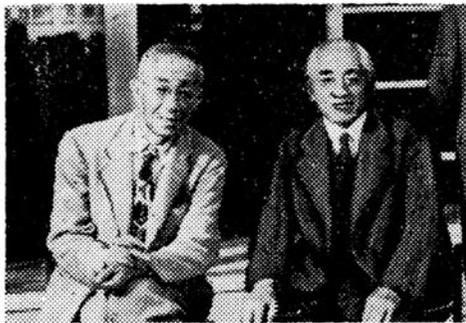
ところがまもなく一枚岩の瀧のあるところに出ました。勿論水量はそう多くありませんし、直下するものではありませんが、その高さはすばらしいものです。私達は慎重にホールドを求めて河身をのぼつたり、岸をまいたりして、その上部に達すると、さらにその上に、それをのぼるとまたその上に、それ位の瀧と滑の連続です。高さは高差四〇〇米ばかりです。大體一、〇〇〇米に近いものと思われ、この山にこんなところのあることは豫想もしなかつたことです。前人未踏といつたら、先蹤者があると失禮ですから、ただ単に私達が登つたことだけを報告しておきます。

瀧の上はダケカンバ、コマツガなどの密林でその上はハイマツ帯につづいていきます。正午一行八名無事頂上の鳩ノ峯コースに出ました。それから頂上小屋へきて休憩、この日無類の晴天で、早池峯、岩手山、駒ヶ岳、焼石、栗駒など北上、奥羽兩山脈の諸峯がごとごとく見え、また最近國立公園指定に決定された陸中海岸の大觀をほし、いまにすることができました。

### 山上の賓客

塩田 輔雄

今年も夏山に登るための足慣ら



★等々の後継部隊が出た事は、加賀君のアルプス登りは、日本山岳會同人のアルプス行の淵源とも云える。

その時の珍談奇聞は何一ツ覚えていないが、ミュンヘンのホテルにネイルドブーツで飛び込んで、ロビーの大大理石の床で閉口したという話だけは頭に残っている。今頃はミュンヘンあたりから、ネイルドブーツをはく人もあるまいが學生で(昔の)單身歐洲に出かけて山登りをやって来た度胸と勇氣は買ってもらいたい。尤も彼はお金持のボンチであつたが。

それから幾年の後だか覚えてないが、日本山岳會の大阪在住の會員諸君の肝煎りで、登山講演會を催した事がある。その頃のグループの中に夕陽丘高等女學校の先生をして、朝輝(アサヒ)譯多留竹下英一兩君が、「僕の學校の卒業生で、非常な才媛何某がある、山登りもするが、あした美人を

### 老友・加賀正太郎

★  
高野鷹蔵

は横濱にいたが、かねての話もあり、早速秘蔵のBテッサイと、Cテッサイのレンズをかかえて出かけて行き、その披露の宴にもつらなり、その翌日からこの内裏難の様な美しい新婚夫妻の寫眞を、泊り込みで寫した數が約五打の乾板を費した。花嫁御の千代子夫人には衣裳付けと髪結いとが付ききりで、三日もかかつたが寫すそばから近くの寫眞屋の暗室に飛び込んで現像をして見ては、また複寫し直すと云う次第である

一體全體どう云うわけで、アマチュアの私に、こんなに勞苦をさしたのかわからない。勿論寫眞がうまいわけがない。多分今から考へれば、お定りの堅い新婚寫眞を嫌つてそのワルサであつたかも知れない。盲蛇式に我流をやつてのけたのも、私の若さのワルサであつたらう。そのプレートは本職の手で修整をさせてプリントさせたものが、今も尚ほ加賀邸にあると、ついこの間加賀君が云つていた。私の手許に残つてあつたこの原板は大正十二年の關東震災で、辻村のアルプスの寫眞の原板、その他と共に私の家と共に焼けてしまつた。焼跡に行つて見たら高さ三尺ばかりの硝子の塊になつていた。

しが何んとなく残つてる。そこで恐る恐る「君は加賀君かい」と聲をかけたら、向うで「それでは君は高野君か」と云う次第。双方が全く見忘れていたというよりは私にとつては加賀正太郎と云う男は、美男子の標本の如く頭に残つてるから、如何に年をとつても、こんな薄汚い老人にならうとは夢にも思わぬ程であるから、よもやこれが加賀の年のはてとは思えないからである。向うも私を思い違ひした程私も勿論乾枯らびた老人となつたのであるが、こちらは加賀君の如く好男子でないから、間違えた加賀君の方が私より年は若いボケたと云う事にして置く。(上の寫眞は昭和二十四年九月二十四日のもの、向つて右高野、左加賀君)

偕てこの時は加賀君の命取りの病氣の第一回の手術をし以後だつたと記憶している。その後の再發で聲を失ひ、其後一、二回會つたが、どうも進んで同君と昔の様に會えない。それは今は筆談であり、どうも痛た痛たしくて耐えられない。ましてや令夫人がそばにいて、總ての介錯をされるその勞苦といたまじさと思うと、會いたいと考へても遂に遠慮してしまうのである。

斯くこの三、四年間に會つたのは三、四回であつたか。この七月にまた大阪日赤病院に入院と聞いて手紙を書いたら、令夫人から病狀を知らされた。素人の私にも其經過は讀めていたが、遂に来るものが来てしまつた。私も老人となり猛暑の旅をする事も出来ず俸儀にも列せずに遙に其冥福を祈つた

しと、四月十一日郊外の圓山に登る。夏道のそここにはまだ雪がある。頂上の石に腰を下して、回想に時を過したとき、ゆくりなくもその後から山崎春雄先生が登つて來られた。市内でお目にかゝること屢まであつても、この山の上で御一緒とは偶然であるとはいへ私と腰を下し景観を眺め年らゐるいろなお話しをした。ヘルベチアヒュッテのこと、マナルス登山中の御念恩のこと、定山溪奥に建てられた右股小屋も先生の設計の御勞作であつたこと。そしてこの右股小屋を根據とすれば余市岳に樂に登られるということなどもお聞きした。

先生の山によせられる熱意と思慕は二十有六年の昔、我々年少の時分にヘルベチアの建設を完成せられ、今も寂れた白樺林の美しきが中になつかしの山小屋が、山を慕う人々によつて炊さんの煙をあげている。而もその反對側の方に新しい小屋をたてるために種々御骨折りをして下さつたというこのヘルベチアや右股小屋のある一帯の地は札幌を流れる豊平川の上流、石狩、後志國境の水源地であり、こゝには余市、朝里、白井、無意根も近く、札幌地方の奥地帯山岳群としてむしろ春山登山としては絶好の山々なのだ。

私は老先生の多年に亘る願望が山と谷と林とのしやまに、二つの山小屋となつて、毎年幾百千の岳人を迎えるであらうことに深甚なる敬意と感謝をさし上げる。歸りは残雪を踏みながら麓に下りた。谷間の水は雪解の水をあつめてこん

んと流れている。やがて、この谷間にも福壽草が黄色の花をつるであらう。

### 新村正一氏の奇禍

キヤラバン・シユーズの普及に活躍中であつた山晴社の新村正一氏(會員番號三二四一)は九月九日夜、山晴社より歸宅の途中、千葉縣市川市菅野の自宅附近においてスクーター事故のため重傷、鴻ノ臺病院に收容されたが、十日前七時惜しくも死去した。氏が終戦直後、會の再建期に大きな寄與をされたことは、われわれの記憶に新たなところであり、謹んで哀悼の意を表する。

### —ナイロン、麻、綿製—

各種テント、リュック、アノラック、

ザイル、スリーピングバックの専門店

### 三喜産業

東京都千代田区大手町2-4  
電 和田倉 (20) 4810.4984.4985



### 圖書基金の募集に就て

虎ノ門のルームが焼けてから滿九年が経過した今日、お茶の水の圖書室も會員諸兄の寄贈其他の厚志によつてやや昔の面影の何分の一かは復元しつつあります。今日に到る迄の會員の心こもつた御配處には感謝の言葉もない位です。大分集つたし、また何日かはやらなければと思つてゐた圖書の整理を夏休みを期して現在進めつつあるのです。仕事を始めてみて色々なのが判つて來ました。

その一は山岳會として當然具えておかねばならない本が實に少い事、次に紛失しているものが少くないと云う事でした。

之の紛失の問題について考へてみますと貸出簿との照合ではほんの少数が未返還であつて本の所在は大體確認出來ましたが、その他は完全紛失の状態にあります。善處によつて本を圖書室から移轉させたとか、本に足が生えない限り、言い難い言葉ではあります。盗難にあつたとか考へられませんが、管理の手段方法に遺憾な點が多々あつたと思ひますが、何にもまして貴重な藏書を寄附された會員に申譯ない次第です。山岳會も世間並みになり下つたねとあつさり割切る向きもありましようが、又一方なんたる始末であるかと憤然退會を申出られる向きもあるかも知れず、眞に恐縮せざるを得ま

せん。當然會として藏書すべき本も甚だ僅少で買いたいもの、海外へ注文したいものは相當數あるわけですから。

以上の二つの問題にしても先ず手をつけるべきは本の整理にある。それを完璧な整理の手段方法をとらなければ、と考へておりました。所、會員林誠治氏と東京女子大山岳部の堂本謙以下の御助力が得られたので、お蔭で國會圖書館なみの或はそれ以上の整理の方法がとられて着々と進みつつあります。其の十進法と云うのを——小生輩には初めてのこと、——基本にして二類別のカードを作り、著者別、地域別、書名別等約七項目に沿つてカードを作製してゆく由です。一萬枚近いカードは恐らくここ三カ月位で出來上るでしょう。

これで整理の方は一段落という目安がつかしましたが、ここでお金の問題に行き當るわけです。山岳會の財政状態が豊かであれば問題ありません。然し世にもこれほど貧乏な社團法人があるだろうかと思はれる程會にはゆとりがありません。戦災以來本の購入は殆ど一冊もない位で凡ゆる事は會員の寄附に頼つてゐる始末です。勿論會費の納入状態も良好とは云へません。

これからは後は僕の夢であり、理想であります。何れか理事會なり役員總會にかけて決めてもらおうと思つてゐますので、この欄をかりて會員諸兄にもお願いしたいのです。

ここで又會員諸兄に表題の基金の寄附を御願ひするということは眞に心苦しく存じますが、何卒御力添えを御願ひ申上げたいのです。基金の目標額は八十萬圓位に決めたのであります。其の内訳は

- 1 圖書整理費 七萬圓
- 2 圖書基金 五〇萬圓
- 3 書庫建設費 二三萬圓

1の整理費にはカード及びカードケースといふ金額の嵩ばるものゝ外は備品となるべきものが含まれます。それに製本に要する費用等2の基金は之を元に於てこれによつて生み出される利子其他を今後の毎月の圖書購入費に當ていと考へます。ですから目標額が達成されるまでは本の購入は見送る事になります。

3の書庫に就いては前々から時たま話があつたのですからこの機會に作つてしまおうと、少々氣の早すぎるかも知れない計畫なのです。というのは來年は山岳會の五拾週年に當るのでその記念事業の一つとして書庫位は建てたいという希望も會員の中にあり、賛成の向きも多い様なので時期を繰上げて早速取掛り度いと考へます。立派なもの出来ませんが、耐震耐火の點は充分なものでありたいと念願してゐます。

だいたい以上のようなわけでありますから、決つた節にはもちろん會報でお知らせしますが、どうぞよろしく願ひします。

初見 一雄

#### 圖書基金寄附(敬称略)

- 五百圓 沼井鐵太郎
- 一千圓 初見 一雄

人間關係の生み出す不純な分子のはいつてくる餘地はほとんど無い——彼を取巻く存在は、ただ風と霧と光芒だけだ。無限の宇宙に於ける空間の廣がりだ。彼はいまその地上の一點に立つた一人の人間である。孤獨なる人間！

獨りして、寂寞とした無限の光芒に歩み入るとき、人は人間存在の根底に觸れようのではない。少くとも、この無言の對話は、若者の心の内部に深く浸透し、その精神的骨格の造型に役立つだろう。

しかしながら私は、その故に單獨登山が山登りのうえで最高のものであると思つていない。否むしろつ協同の力によつて困難を克服し、その楽しみも苦しみも、また喜びも悲しみも、ともどもに頰ち合うことこそ山登りの本道であることさ考へてゐる。ただ私にとつては、このようにまつたく獨りで氣樂に山歩きができるようになつたことは、この上なく喜ばしいことなのである。

——果しなく展開する廣莫たる原野を、あるいはまた千古の歴史を深くその山肌に彫みつけた荒涼とした山頂を、ただひとり歩みながら、無形の雲と風に呼びかける。この無言の對話に答えてくれる山々のささやき。その自然の答を、平原のいや果てからこの高い山嶺に吹きつける風に聴く術を知つた。風よ！ わが精神の形成者を教えてくれた古い詩人の言葉の意味を原とその上に聳える山々であつた

た登山記の一節である。時は流れた。その間に北海道の山岳周辺の環境も一變した。音更川も石狩川も、もはや昔日の面影はない。日高山脈だけが、山岳人のためにわずかに残された唯一の岳苑になつてゐる。

誰にも、この地表のどこかに、永久に拓かれざる山野、永遠に閉ざされた山岳の存續を固執する権利はないであらう。しかし私は、日高山脈が、今もそうであるように、その地質時代からの自然の姿が長く保存されることを願う一人である。機械と騒音だけが人間の辿りつく運命であらうか。

科學と知性だけが、存在の意義を主張するに足る唯一の神の啓示であらうか。人間の手による自然の克服は、つねに無條件に何者に対しても優位を承認するべきであらうか。われわれはせめて、北海道にあつては、日高山脈の主要な部分だけは、學術的な見地からも、自然のままの山容を永久に存續さすべきであると考へる。(一九五四・七・一六)

日本山岳會編  
山 登 り  
(アサヒ相談室)  
重版・定価 100 円  
朝 日 新 聞 社

# 会務報告

## 七月役員總會

七月七日(水)於ルーム  
出席者 榎會長、松方副會長、理事、成瀬、小原、渡邊、交野、沼倉、金坂、初見、折井、今村、千谷、評議員沼井、岩永、神谷、辻、堀田、早川、村井、監事、石原、議事  
一、規程規定、支部規定、會計處理規定作製の件  
早急に委員を決定進行のこととす

## 報告

- 一、マナスル登山経過報告 堀田  
サマに於ける不慮の妨害の爲に止むを得ず中止して、ガネツシユ並びにヒマルチュリ踏査を行つた事情を主として報告あり、(全隊員歸着後本會としての歸還報告會を開催のこととす)
- 二、ウエストーン祭参加の件 小原
- 三、山梨支部總會出席の件 成瀬
- 四、北海道(國體關係)出張の件 金坂
- 五、新潟鐵道局主催山岳講習會出席の件 渡邊
- 六、「山岳」第四十九年編集狀況の件 交野
- 七、學生部の近況 金坂
- 八、月例會計報告 沼倉

## 八月役員總會

八月十一日(水)於ルーム  
出席者 榎會長、日高副會長、理事、成瀬、渡邊、小原、金坂、初見、折井、吉阪、千谷、外山、常任評議員、沼井、岩永

議事  
一、支部長會議開催の件  
本部・支部間の連絡を計り併せて岳連問題に關する意見の交換を行うために開催のことに決定

二、「山岳」バックナンバ―處分の件  
第四十七年以前のバックナンバ―約五百冊は現在賣却の見込なき爲めに之を一口百圓の圖書基金寄附者に對し謝禮の意味をもつて進呈のこととす。

## 報告

- 一、第九回國體大雪山登山の件 渡邊
- 二、名譽會員加賀正太郎氏逝去の件 榎  
八月八日逝去されたので本會より弔電・供花をもつて弔意を表した。
- 三、アルゼンチンのドウラギリ遠征隊長死去に對し同國大使館申問の件 榎
- 四、イタリヤ登山隊K(ゴドオウイン・オースチン)登頂成功に對し祝電の件 榎

## マナスル登山隊歡迎報告會

八月十七日(木)於體協會議室  
國體登山行事の爲に開催の時期を失した爲か參會者が少なかつた。別宮評議員の首領によりビールの杯をあげて無事歸還を祝い、隊員各位の勞苦を慰めて後左記の通り報告講演が行われた。

歸還挨拶 堀田隊長  
現地事情について 村山隊員  
ガネツシユ及びヒマルチュリ踏査について 山田隊員

## スライド映寫説明 山崎隊員

今回のマナスル遠征がサマ現住民による不慮の妨害に逢つて止むなく引き下がらざるを得ぬ事情にたぢいたつた次第は隊員はもとより隊を送つた會員一同にとつて無念至極であつたが、今回の報告を聴いてヒマラヤ遠征等の仕事をやる爲にはその準備と勉強の範圍がとてつもなく廣いものであることが痛感された。ラマ教徒の狂信行爲がなかつたならば或いは征頂可能であつたかもしれないが、然らずと言えど今回の隊の経験はヒマラヤへの歩みを踏み出したばかりの我が國登山界にとつては貴重なものであり新しい根が張り出された事は慶賀すべき事と思う。細部にわたる報告を短時間の會合に期待するは無理であるがヒマラヤに關心を持つてゐる會員にとつては聴きたい事柄が一杯ある。それで今回參加の隊員が主となり廣く會員有志と合同して「ヒマラヤ研究會」を開くこととし第一回は八月二十五日に開催される事になつた(三頁参照)

## 山岳第49年豫告

長らくお待ちせいたしました「山岳第四九年」も目下編集委員の手で原稿の整理に當つており十一月下旬には發刊で見込みなので主なる内容をお知らせ致します

### アンナブルナ

京都大學々士會山岳部  
アコンカゲア登頂記 關根 吉郎

一九五三年マナスル遠征報告 三田 幸夫

中尾 佐助

川喜田二郎

堀田 彌一

伊藤秀五郎

林 和夫

近藤 等譯

加賀正太郎の追憶 中村清太郎

高野 鷹藏

ヒマラヤン・ノーツ 望月 達夫

尚アンナブルナ、アコンカゲアマナスル、ガネツシユヒマール等の優れた寫眞の他アメリカ山岳會遠征隊の撮影になるKの寫眞多數を同會の好意により掲載する豫定ですから御期待下さい。

# 屋久島べつ見

## 古澤 肇

望洋の孤島ともいへべき屋久島へ行つてきました。七月二十五日夜十一時鹿児島出帆の橋丸は南國の若い男女の船客を載せて納涼船のような賑やかさです。翌二十六日未明種ヶ島西の表に寄つて屋久島一湊着八時半、宮の浦に寄り安房に上陸したのは午後一時でした。上陸直ちにむつとする暑さと激しい俄雨にあいましたが先ず營林署へ行つて軌道便乗の許可を貰いました。翌二十七日朝十時乗車、小杉谷まで二十軒、二時間、豪壯な谷と清冽な水とに目を見はりました。小杉谷は標高七百米、蒸熱帯氣分を離れずと涼しく、ここで營林署の宿泊所、幽岳荘に泊めて貰いました。翌二十八日は雨のため滞在、晴れ間を見て千尋瀧を見物。

最初の豫定では花の江河の小舎に泊つて永田岳まで行くつもりでしたが、今年は屋久島も例年に比べて天候が悪いとのことで、それに肝腎の花の江河小舎がひどく荒れていると聞きましたので、宮之浦岳を日歸することにしました。七月二十九日朝五時、宿を發つて花の江河に向いました。小杉谷から上流尚四軒程は軌道があり屋久杉を伐り出しています。花の江河小舎着十時十五分、雷雨のため一時間餘り待機、雨止みを覗つて頂上に向いました。花の江河の濕

原を通り黒味岳を捲いて登つてゆきました、屋久笹の中に實生の屋久杉と石楠花が点在して俊に美しい庭園のようです。ここで大きな社鹿を見たのはよい記念になりました。宮之浦岳頂上一時十分。九州の最高點。濃霧、三十分程ねばりましたが展望なし、ここから一投足の峻峰永田岳が見られなかつたのが残念でした。往路を引返した山、時々晴れ間が見えましたが青空かと思つていると海だつたりするのが珍らしい氣持でした。途中また俄雨にあい濡れたり乾いたりしながら宿に歸つたのが七時でした。

翌三十日小杉谷を發ち安房に下りましたが、栗生から鹿児島行の船が出ると聞いて島の南側が見たくなり、尾の間、湯泊を通つて栗生に出、(ここでは船便が延びたので大江の瀧という巨瀑を見に行きました)。八月四日朝、折田丸に乘船、島の西岸の斷崖を眺めながら歸りました。この船は永田に寄りましたので幸いよく晴れた永田岳を海上から仰ぐことができました。

歸來、藍を流したような黒潮の流れの中に浮ぶ鮮緑の島の姿は深く心に残つて忘れ得ません。九月になると島の各部落の若者達は御岳詣りと稱して多勢で宮之浦岳目ざして登る仕来りだそうですが、その頃から大氣は澄んで登山には絶好の季節になるのだそうです。この行について種々御教えを頂いた加藤數功さんに感謝します。

多方市寺町四七〇四  
マナスル基金芳名(敬稱略)

五千圓 日高信六郎  
一千圓 越後支部  
一千圓 松本熊次郎

### 寄贈圖書

(昭和二十九年八月末現在)  
左の通り本年に入つてから各方面から圖書の寄贈を受けました。重ねて寄贈者各位に御禮申し上げます。(敬稱略)

- 1 エヴェレストへの開闢—征頂記 録寫眞集(朝日新聞社)
- 2 The Canterbury Mountaineer シドニー・ブルックス

### 會費についてお願い

本年度の會費納入につきお願いいたします

★基本會費 年額八〇〇圓  
★ルーム維持費 年額 一五〇圓

○圓  
地方會員は八百圓を、東京都、千葉、埼玉、神奈川居住會員は九五〇圓を御納め下さい。尚東京在住會員は支部費五〇圓を加え一〇〇〇圓となります(ります)

★入會金 五〇〇圓  
(本年度から團體登録會費の取扱いは中止しません。團體代表者として入會されることは一向差支ありません)

會費は會の活動と發展の源泉であります。最近の會の財政は決して樂觀を許しません。會の運営上未納の方は早めに御納入下さるよう特にお願いいたします。

- 3 Bergsteigen (七五周年記念號)
- オーストリア山岳會
- Mazama 一九五三年十二月號
- マザマ山岳會
- マナスル 一九五二—一五三 毎日新聞社
- 尾瀬ヶ原 小林義雄
- 白水社・山岳講座第一・第二卷 近藤 等
- Bayerisches Alpenland ローゼ・高橋
- 高橋喜平 雪の祭典 明玄書房
- 海野・西岡・諏訪多共著 登山技術と用具 海野治良
- オーストリア山岳會々報(一九五四年三—六月號) オーストリア山岳會
- Appalachia (第二〇卷七號) Appalachian Mountain Club
- ハント・エヴェレスト登頂 朝日新聞社
- 日本山岳會 山登り 朝日新聞社
- Hunt. The Ascent of Everest 松方三郎
- 三田幸夫 山なみはるかに 白水社
- 梶本・前田共著 ロッククライミング 梶本徳次郎
- 百瀬・高室共著 南アルプス 百瀬舜太郎
- The Himalayan Mountaineering Institute Darjeeling 外務省
- 長尾宏也 山小舎の窓 明玄書房
- 小島六郎 夏の山 冬の山 明玄書房
- 慶應山岳部 登高行 第二年 榎 有恒
- The National Geographic



**登山用品**  
東京・新宿駅前  
**かざみ**  
TEL (35) 2959・6711

Magazine T. Lane Skelton  
24 登山裝備と合成纖維  
Viscoelastic Aspect of Skiing-Wax 篠田軍治  
25 山と溪谷(創刊號より) 吉田竹志  
以上の他、山と溪谷、國立公園新ハイキングが山と溪谷社、國立公園協會、坂倉登喜子氏よりそれぞれ寄贈されています。  
昭和廿九年九月廿五日發行  
東京都千代田區  
神田駿河臺四ノ六  
發行所 社團 日本山岳會  
法人 波邊 公平  
編集者 波邊 公平  
電話神田(25)八九五二番  
振替口座東京四八二九番  
東京都港區赤坂宿池五番地  
印刷所 株式会社 技報堂